

●春日部市民文化講座（第38回）

◆日 時：2022年2月4日(金) 10時（ぼぼら春日部4階会議室）～11時15分

◆テ ー マ：講演「茶の湯の掛物の役割」

講師：江原 望さん（美術表装「江原小林堂」）

◆ゲスト紹介：1968年：埼玉県越谷市生まれ、埼玉県立越谷西高校卒。1987年：加麗堂 表具弥三次氏に師事。1990年：江原小林（えはらしょうりん）堂三代目として入店。2003年：技能グランプリ全国競技大会入賞。2007年：埼玉県技能競技大会 最優秀賞。2015年 彩の国優秀技能者 表彰。埼玉県表具内装組合連合会理事。古来よりの裂地とその裂使いを探求し、伝統的な表具技法を実践している。

■掛け軸の成り立ちと展開

掛け物のルーツというのは、仏教壁画で建物や洞窟の壁に仏様の絵を画いたのが始まりとされています。やがてこれが移動できるように紙や薄い絹に画かれた仏画に変わり、破れないように裏打ち補強し、棒を付けることで仕舞えるようにし、絵の周りに裂地を付けて鑑賞できるようにと工夫されたものが掛け軸とされています。平安時代に密教が中国から伝来した時に曼荼羅図などが日本に入ってきました。鎌倉時代になると禅宗とともに画僧が画いた始祖像、墨跡などが入ってきました。その頃の掛け物は、寺院やお屋敷で拝礼するための対象でした。

■拝礼対象から美術品に

室町時代に入ると「唐絵」が入ってきます。「唐絵」というのは中国の絵画で大きく分けて2つに分けられます。1つは、中国の宮廷直属の画家集団が画いた絵で、花鳥などを細密に画いたものです。もう1つが画僧たちが描いた水墨画になります。水墨画では、牧谿（もっけい）とか玉澗（ぎょくかん）などが有名で、『瀟湘（しょうしょう）八景図』など中国の名勝風景図などがあります。こういうのも元々は仏画の脇掛けとして、拝礼対象の一つとして使われていた掛け軸なのです。これを足利将軍が美術品として収集しだしたのです。それが東山御物と呼ばれて後世に残っていく訳ですが、ここで拝礼対象から美術品としての見方が生まれてきたのです。

■茶の湯と掛け軸

そして、茶の湯との関わり方もこの頃から始まります。その関わり方は拝礼の対象ではなく、美術品として見られるようになってきたのです。その頃の茶席はもっぱら「唐絵」が掛けられていました。その後、侘茶の始祖である村田珠光（1423-1502年）が、参禅の師であった一休禅師から「圓悟克勤墨跡（えんごこくごんのぼくせき、印可状）」を授かります。これを初めて茶席に掛けたという記録があります。それまで拝礼対象であった墨跡が、ここで初めて茶掛けの一つとして使われるようになったのです。珠光の後に武野紹鷗（1502-1555年）が侘茶を継いでいくのですが、「仮名物」を掛けるようになりました。仮名で書かれた歌、特に藤原定家の小倉色紙を掛けて、定家ブームが起こるのです。色紙や短冊、懐紙（かいし）や詠草（えいそう）といったものも盛んに掛けられるようになります。懐紙は、公家や歌人が歌を書き留めるために懐にしのばせていた用紙のことです。

◆千利休以降の茶掛け

その後、千利休の時代になると、「墨跡」は「唐絵」と同じくらいに肩を並べるほど貴重な物として使われるようになります。さらに「消息（しょうそく）」というものが掛けられるようになります。「消息」とは手紙のことです。定家や一休の消息、後には利休や大名や茶人の「消息」なども盛んに作られるようになります。現在、茶掛けと言いますと「一行物」です。「一行物」とは法語の中から一行をとって書かれたものです。「一行物」は、元々禅僧が書いたものですから「墨跡」ということができると思うのですが、千利休の頃までは茶席で用いられていたかという記録がないのですね。記録では、千利休が参禅の師であった大徳寺の古溪宗陳和尚（1532-1597年）の「一行物」を掛けたというのが最初です。それまでの「墨跡」がいにしえの高僧のものでしたが、存命の方でもこだわらないことになり、そこから大きく「墨跡」の概念が変わったと思われます。そこから「大徳寺物」と呼ばれる大徳寺の和尚さんたちが「一行物」を書いて、お茶の宗匠も書いて、大名・茶人も書いて、公家も書いてとどんどん広がっていくのですね。そして、江戸時代になると「一行物」の黄金時代に入り、茶掛けという「一行物」と言われるようになります。これほど「一行物」がもてはやされたというのは、茶道人口が江戸時代に増えたということも影響していると思います。「墨跡」は昔の物で数も限られていますから簡単に手に入るものではありません。茶掛けの需要が増えてくる中で、「一行物」が増えていったのだと思います。千利休以前の「一行物」というのは、茶掛けのために書かれたものではなくて、法語の中でも最も強調したい言葉を敢えて抜き書きして伝えるということだったのだと思うのですが、千利休以降は「茶掛け」という目的のために書かれていったのです。そのために、茶席で使い易い言葉を敢えて選んだり、分かり易い言葉が選ばれた大きな要素だったのではないかと思います。普通の「墨跡」というのは非常に難解ですから、そうしたことから「一行物」が受け入れられる要素だったのだと思います。

■絵の掛け軸

このように書の掛け軸というのが展開していった訳ですけども、一方の絵についても見ていきたいと思います。最初に「唐絵」がありました。その「唐絵」の影響を受けて、日本の画僧による「水墨画」が盛んに描かれるようになります。有名なのは、雪舟(1420-1502年)ですね。「唐絵」の影響を受けた水墨画を「漢画」といいます。珠光も水墨画を描いています。こうした水墨画がやがて和風化して生まれてきたのが狩野派ですね。狩野派は桃山時代から江戸時代にかけて為政者の御用絵師として代々栄えるのです。その他に「大和絵」というものがあります。これは平安時代に始まり、『源氏物語絵巻』などに代表される王朝文化などを色鮮やかに描いた画風です。「大和絵」は、桃山時代になると俵屋宗達という人が現れて、大和絵の流れを汲んだ独特の画法で作品を作っていきます。これが基になって琳派が興っていきます。江戸時代になると尾形光琳(1658-1716年)や酒井抱一(1761-1829年)といった人たちが琳派を継承していきます。江戸の末期になりますと、大和絵、漢画、琳派などを吸収してもっと写実的な絵を描く人たちが出てきます。京都画壇の円山応挙(1733-1795年)や弟子の松村呉春(1752-1811年)が筆頭になって丸山四条派というのをつくります。それが現在の日本画に発展してきました。

■画讃物

それから、「画讃物」というものがあります。これは茶の湯で良く用いられるもので、歌ですとか文章が絵と一緒に書かれているものです。普通は絵と讃は別の人が書きますけれども、「自画讃」と言って絵を描いた人が自分で讃を書いています。「唐絵」の頃から水墨画には書が一つあるという考えがあります。こうした流れから「漢画」でも讃を入れたものを「詩画軸(しがじく)」と言います。桃山時代から江戸時代になると、詩画軸が多くなります。

■茶の湯の掛け物の役割

茶の湯の掛け物の役割を考えますと、『南方録』に「掛け物ほど第一の道具はなし。客・亭主共に地の湯三味の一心得道の物也。」とあります。亭主にとって茶会の道具組の中心となるもので、客はその趣向に亭主の心入れを感じる第一の道具が掛け物であると言っているのです。さらに続けて「墨跡を第一とす、其文句の心を敬ひ、筆者・道人・祖師の徳を賞翫する也」とあり、これを意識すると、墨跡についてはたとえその内容が難解で理解しがたくとも、筆者である高僧を席の床の間にお迎えするのだということを言っていると思います。茶席の掛け物というのは、その筆者こそが肝要であり、そこから内容を吟味していくと、こうやって選ばれた掛け物の役割というもの、ひと言で言うならば茶席の雰囲気統一するものであるかと思えます。

■掛け軸の仕立て方

掛け軸の仕立て方ですが、表千家の「一行物」は殆どが輪襖(りんぼう、写真上左)で仕立てます。遠州流などでは「一行物」でも幢襖(どうぼう、写真上右)を使ったりすることもあります。こうして掛け軸を見ていただくと、裂地についても違いが分かると思います。左は大徳寺の館長さんの一行で、一文字には金紗という裂を使っていますが、中廻しは無地の裂で、天地は揉み紙で、押風帯(おしふうたい)です。大徳寺表具と言いますが、典型的な形で、こういうものは侘びた床に合います。右は「双鯉図」と言いますが、元は円山応挙が描いた物ですが、狩野派の絵師が描いたものだと思います。「唐絵」のように見立てて表具したものです。次の写真右は、少々古い掛け軸で仕立て直しをしようと考えている物で、「画讃物」です。狩野探幽(1602-1674年)から3つに分かれていくのですが、木挽町狩野派の8代目・伊川院栄信(いせんいんがのぶ、1775-1828年)です。江ノ島と富士山を画いて、大徳寺のご住職が歌を詠んでいるものです。左は、古筆裂、歌裂というもので、元々は巻物になっていたものを切断して表装したものです。これは、「伝寂蓮」とあり、時代としては鎌倉時代のものでしょうか。『詩花和歌集』の写本を切ったものです。兄弟子が師匠の表具弥三次からもらい受けた写本を表装し、私が譲り受けて手直した品です。



■自分の好みを見つける

皆さんはなかなか表装まで考えるのは難しいかもしれませんが、自分の好みの色気などを私たちに伝えていただければ、それを形にしていきたいと思いますので、機会がございましたらお手伝いさせてください。と宣伝したところで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

軸の仕立て方の違い、表装による格の違いなど良い勉強をさせていただきました。江原さんは伝統的な表装とともに美大生とコラボして今年も『掛軸と絵画の未来展』に挑戦されるそうです。成功をお祈りします。